

岐阜県 中山間農業研究所ニュース



2022年
第4号
2023. 3発行

清流の国ぎふ

今号の内容「今年度の研究成果を紹介」

試験研究成果検討会を、本所では3年ぶりの対面で、中津川支所ではハイブリット（対面とWeb）で2月に開催しました。今回は、発表の中から3つの成果を紹介します。また、お米の食味コンクールの結果をお知らせします。

夏秋トマト「麗月」の着果特性に応じた栽培方法

【本所担当／矢島隼人】

「麗月」は多収で秀品率が高く、飛騨の主力品種です。本試験では、育苗期間の短縮のため、通常より苗を早く植えた場合の収量等への影響調査と、受粉作業の省力技術を検討しました。

【結果の概要(図1、表1)】

- 2週間遅く播種し、若苗の開花ステージで定植しても、収量は変わらなかった(5月上旬定植)。また同じ日に若苗で定植すると、初期の草勢は強いが、その後の生育に差はなかった。この結果、育苗期間が4～10日程度短縮できる。
- 着果処理として、クロマルハナバチ(在来種)を利用した場合、ホルモン処理、振動受粉より可販収量、果数、秀品率が優れ、受粉の作業時間が大幅に削減できた。今後は、試験規模を拡大しての効果や、年次変動の確認を行い、麗月の特性に応じた栽培技術を確立していきます。



第1花房米粒大



第1花房ガク割始め

図1 若苗の定植時の開花ステージ

表1 着果処理と収量、平均果重、品質

区	可販収量 (kg/10a)	果数 (個/株)	平均果重 (g)	A品率 (%)	格外率 (%)
マルハナバチ	9.0	27	136	50	7
ホルモン処理	8.2	20	165	23	15
振動受粉	8.1	22	150	53	13

※収穫期間:8/20～10/31

カラーピーマンの3Sシステムによる多収栽培

【支所担当／杉本和広】

カラーピーマンは、近年国内需要が増加していますが、その多くが輸入で、国内生産量は少ない状況にあります。その理由として、土壌病害に弱く、土耕栽培の連作が難しいことが挙げられます。

そこで、当所で開発した3Sシステムにより、土壌病害を回避し、安定生産を可能とする栽培方法について、小型品種「L3シグナル」を使って検討しました。

【結果の概要(図2、図3)】

- 土耕よりも着果数が多く、可販収量が多かった。
- 平均果重は土耕よりもやや少なかった。
- 樹勢を維持しやすく、10月の出荷量が多くなった。

これらのことから、カラーピーマンの3S栽培では土耕以上の収量を確保できると考えられました。この結果を踏まえて、さらなる収量の増加を目指し、3S栽培技術の開発を進めていきます。



図2 3S栽培の様子(品種:L3シグナル)

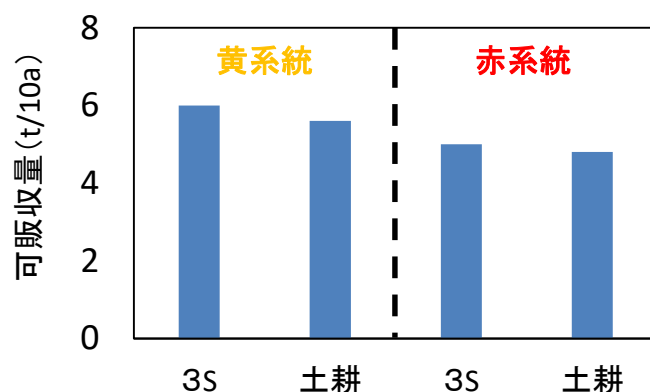


図3 カラーピーマンの栽培方法の違いと可販収量 (品種:L3シグナル)

温暖化が将来のモモとリンゴに及ぼす影響

【本所担当／安江隆浩】

永年性の果樹では、温暖化により栽培適地の変化が予想されます。そこで、気象庁の温暖化シナリオモデルを使用し、当研究所果樹園(高山市国府町)における平均気温、生育期等を予測しました。

【結果の概要(図4、図5)】

1. 平均気温は、30年後に1℃上昇し、郡上市白鳥町長滝と同じに、80年後には3.9℃上昇し、美濃市や富山市と同程度となる。
2. モモの収穫時期は、30年後に約5日、80年後に約20日早まる。
3. このため、お盆に収穫できるモモの品種は、「白鳳」から30年後には「飛騨おとめ」、80年後には晩生の「川中島白桃」となる。
4. リンゴ「ふじ」は、着色不良や軟化により果実品質が低下しやすくなる。このため、より着色が良く果肉の硬い品種が必要となる。

これらの予測を踏まえ、今後は温暖化に対応した樹種や品種選定、対応技術開発を進めます。

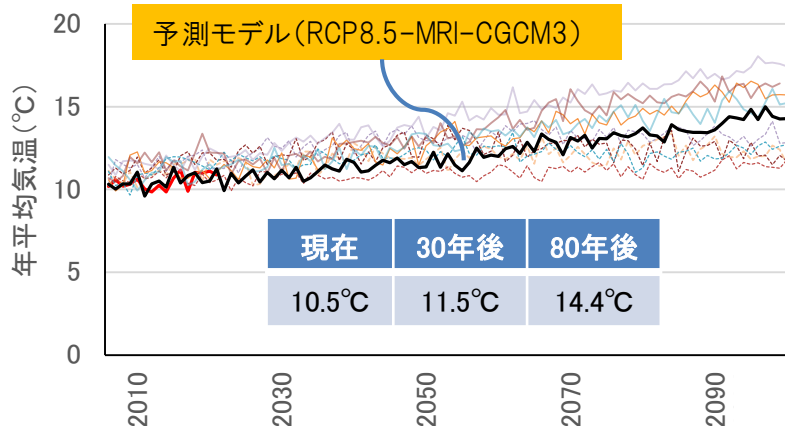


図4 当研究所果樹園の年平均気温の予測結果

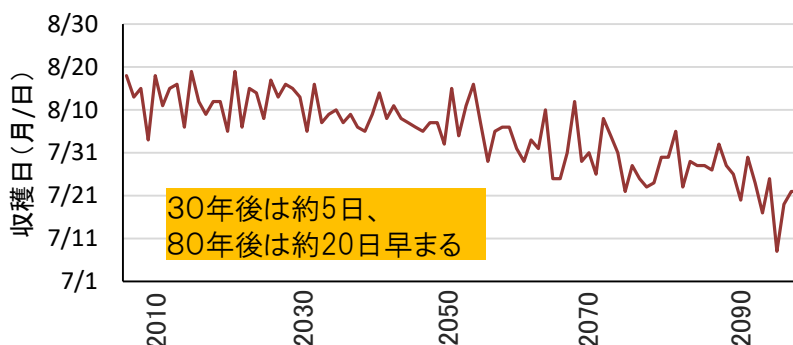


図5 当研究所果樹園のモモ「白鳳」の収穫時期の予測結果(RCP8.5-MRI-CGCM3予測モデル)

第24回 米・食味分析鑑定コンクール国際大会in小諸にて金賞受賞

温暖化にも対応した米の良食味品種を検討中

【本所担当／可児友哉】

令和4年12月2～3日にかけて長野県小諸市で行われた日本一大きな食味コンクール「第24回 米・食味分析鑑定コンクール国際大会(都道府県代表部門)」で、当所栽培の「きぬむすめ」が金賞を受賞しました。

当所では、令和2年から「きぬむすめ」の栽培試験に取り組んできました。「きぬむすめ」は農研機構九州沖縄農業研究センター(福岡県)で育成された品種で、「コシヒカリ」より熟期が2週間程遅い品種です(表2)。そのため、標高が高い地域での栽培は不向きですが、お盆過ぎに穂が出て、涼しい時期に穂が実るため、品質が良く、味も良くなると考えています。



飛騨と言えば「コシヒカリ」が一番の品種ですが、今後の気候変化に対応できるよう、当所ではこのような品種比較試験を続けていきます。

表2 「きぬむすめ」と「コシヒカリ」比較(飛騨市古川町標高500m)

品種名	田植 え (月.日)	出穂 期 (月.日)	成熟 期 (月.日)	玄米 収量 (kg/a)	千粒 重 (g)	整粒 率 (%)	食味 値	味度
コシヒカリ	5.16	8.05	9.10	51.6	22.2	72.4	88	83
きぬむすめ	5.16	8.25	9.27	47.5	22.1	72.6	91	93

注1) 整粒率: 静岡製機ES-1000

注2) 食味値: 静岡製機BR-5000

注3) 味度: 東洋ライスMA-30A

岐阜県
中山間農業研究所

本 所 〒509-4244 岐阜県飛騨市古川町是重二丁目6番56号
TEL: 0577-73-2029 FAX: 0577-73-2751

中津川支所 〒508-0203 岐阜県中津川市福岡1821-175
TEL: 0573-72-2711 FAX: 0573-72-3910

研究所ホームページ <https://www.k-agri.rd.pref.gifu.lg.jp/>